

働く高齢者 労災から守ろう



日本造機具製作所。工場の階段にはり止めのマットを敷いた

職場でできる対策の例

- 1 階段に手すりを設ける
- 2 水分や油分を放置せずこまめに掃除する
- 3 滑りにくい靴を利用する
- 4 足元注意 危険箇所には標識などで注意喚起

(厚生労働省の「エイジフレンドリーガイドライン」を基に作成)

増加傾向にある60歳以上の労災事故。2023年には広島県内の労災による死傷者の28.8%を占めた。事故をどう防ぐか。広島産業保健総合支援センター(広島市中区)は、職場の環境改善と一人一人の体力向上を促すため、企業に出向いて助言する出張サービスを始めた。実際に改善を進めている呉市の製作所の実践を取材した。(山本真帆)

広島産業保健総合支援センターが出張助言

呉市広地区で蒸気タービンなどを製造する新日本造機具製作所。生産技術課の高橋和利さん(62)は製造の現場で働いている。「最近はずっとした段差でつまづき、けがが増えた」。けがを予防するまでではないが、ひやりと冷えることがあるという。

同社は昨年、定年を65歳に引き上げ、社員407人のうち33人が60歳以上だ。工場は第11海軍航空廠時代の建物の一部を利用しており、段差も多く老朽化が進んでいる。現

階段に滑り止めマット／個別に運動プログラム



工場内に取り付けた暑さ指数の計測器

場の高齢化を見据え、労災事故を未然に防ごうと昨年10月、センターに出張サービスを提供したという。

センター側のアドバイスを受け、階段には滑り止めのマットを敷き、つまづきを防止するため通路に電話などの配線が延びないように工夫。小まめな整理整頓で転倒の危険を避けることにも取り組む。熱中症予防では、エアコンのない工場内に暑さ指数の計測器も取り付けた。今後は床にできた段差も解消するとい

と協力し、依頼のあった企業に出向く。危険箇所を把握するために職場を回り、従業員一人一人の体力を測定。結果に応じた個別の運動プログラムを提案する。

この製作所では、60歳以上の社員が参加した。仕事の合間にできるストレッチや、足の筋力アップのトレーニング法を教わり、3カ月後に再度測定して取り組みを評価してもらった。高橋さんも「トレーニングを始めるなど運動習慣ができた。これからも体力の維持に努めたい」と張り切る。

センターの担当者、寺村清美さん(52)は「働き手が減る中で、高齢世代に元気に働いてもらいたいという企業は多い。何から始めたらいいかわからないという企業のきつかけになれば」と説明する。環境を整えるだけでなく、従業員のセルフケアと両輪で進めていくことが欠かせないようだ。

※中国新聞社の許諾を得ています。